

## 「恐怖」と「徳」～ロベスピエールにおける「死刑」～ “Terror and Virtue”: Capital Punishment for Robespierre

### Abstract

“Maximilien Robespierre” was a political figure in France 18c known for his role in the French Revolution and the Reign of Terror. He had many who opposed his vision of the revolution executed. However, he was called “a person of integrity,” so there are contradictions in how he was evaluated. We will aim to interpret Robespierre in regard to capital punishment.

### 1. 目的

フランス革命を主導し、後に恐怖政治を行った人物、ロベスピエールの行動理念を再解釈し、恐怖政治、大量処刑に至った原因について考察する。

### 2. 調査・研究の方法

ロベスピエールの行った演説や、伝記、フランス革命研究といった文献を読み、彼の政治理念を分析する。

### 3. 先行研究の批判

ロベスピエールは「清廉の人」と呼ばれていた一方で、恐怖政治を主導していた。先行研究ではこうした齟齬について評価が統一されていない。またフランス革命初期、彼は「死刑」に反対していた。しかし、恐怖政治期に大量処刑を主導している。こうした矛盾も先行研究において説明されていない。ここで、「ロベスピエールの死刑についての主張は一貫した政治理念に基づいているのか」という問いが生まれる。

### 4. 論証・考察・結論

先の問いに対して、我々はロベスピエールの演説について検討し、その結果「死刑についての彼の主張は一貫した政治理念に基づいている」と考えた。

そして、政治理念が一貫しているのならば、「なぜ大量処刑を主導したのか」という問いについては、「徳」(“vertu”)がその要因になっていると考える。この言葉は

彼の政治理念を形成する重要な要素である。それは普遍的に人々が持つものであり、公共の利益を優先する意味も含む。これが彼の死刑における主張と結びついたのである。

それ故に、革命初期にロベスピエールが演説内で批判していた死刑と、恐怖政治下に行った死刑は同一のものではない。前者は「徳」により批判されるもの、後者は「徳」によって肯定されるものだと言える。そのため、彼の死刑についての立場が変わってしまったように見えるが、その根底にある理念は変わってはいないと、「徳」の観点から結論付けられる。

「徳」によって政治を行っていったことが結果として、恐怖に結びついた。そして、政治理念の中に潜む要素が大量処刑を引き起こしたのである。

### 5. 主要参考文献

- ・松井道昭 (2013). 「ロベスピエール演説集」. <https://ameblo.jp/matsui6520/theme-10110081214.htm>. 2025年1月15日.
- ・マルタン, J. C., 田中正人 (訳) (2024). 『ロベスピエール 創られた怪物』. 法政大学出版局.
- ・マクフィー, P., 高橋暁生 (訳) (2017). 『ロベスピエール』. 白水社.
- ・ブウロワゾ, M., 遅塚忠躬 (訳) (1958). 『ロベスピエール』. 白水社.
- ・ブラング, T. C. W., 天野知恵子 (訳) (2005). 『フランス革命』. 岩波書店.
- ・高山裕二 (2024). 『ロベスピエール 民主主義を信じた「独裁者」』. 新潮社.